

靴の歴史散歩 ⑨1

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

ひと口に産業資料といっても、その収集する範囲は広い。今回は団扇絵に続き、絵で見る産業資料として、引札を取り上げてみたい。

「引札」を国語辞典で読んでみると「商品売り宣伝するために、諸方へ配る広告の札紙」とある。

今でいえば、新聞の折り込み広告のようなものだが、それよりはもう少し、各家庭で大事にされた、広告媒体であったようである。

明治中期ぐらいまでは、和紙に木版摺りが多かったが、明治中期以降は、印刷技術の発達もあって、多色刷り印刷が主流となった。明治後期の最盛期には、割安な既製の印刷見本が出来たりして、注文に対応するようになったから、それ以前の引札に比べ、精彩を欠くようになったのは、残念ながら否定できない。

通常のものとは別に、正月用の引札というものもあった。これは年末年始の挨拶回りの配り物で、松竹梅や鶴亀など、お目出た尽しの絵柄が多かった。引札が多く集まる家は、それだけで密やかな自慢にもなったという。

参照の写真は、主題の「靴の歴史散歩」にはそぐわないが、表題の『かわとはきもの』には合致するので、とりあえずお許しをいただきたい。

^{よろず} 萬履物製造販賣・^{いなべ} 員弁郡梅戸井村南金井
(現・三重県いなべ市の内)の藤田屋商店が、明治末か大正初期に発行したと思われる引札である。ごく典型的な構図で、右三分ノ二に絵を置き、左三分ノ一に商品と住所店名が表記されている。

若いお母さんと、七五三らしいお嬢さんが、豊表のぼっくりを手に取り眺めている絵で、何んとも可愛いく微笑ましい。

引札を書くに当って、田村コレクションの『明治の引札』(しこうしゃ図書販売)、池田屋コレクションの『大阪・枚方の引札』(東方出版)、それに北原照久コレクションの『繁昌図案』(マガジンハウス)など、手元に置きながら話を進めてきたが、なぜかそのいずれの図録にも、履物商の引札はあっても、肝心の靴小売商の引札が、一枚もないことに気が付いた。これについては次回の考察としたい。



タテ25.5cm×ヨコ37cm